

大地に刻まれた西会津の足跡 地形からみた西会津の歴史 その2

—宝川宿—

文：田崎 敬修

宝川を訪れますと現代風の家々が立ち並んでいますが、ここはかつて宿場町だったよね、という雰囲気
が満ち溢れているのに気付きます。

鳥井峠道は山にしては凹凸が少なく歩きやすいため、古くから道として利用され麓の宝川は交通の要衝
の地でした。『新編会津風土記』（1803（享和3年）～1809年（文化6年）に会津藩によって編纂された
領内の地誌書）には、「この村は陸奥と越後の境界であるため昔は境村と言っていたが、蒲生氏の時代（1590
～1598年、1601～1627年）に今の名前に改めたという。昔は開法峠・下宝川・古屋敷・遠瀬戸の4区
に分かれていた。いつの頃か今の地に移った。」とあります。

4つの場所を『宝川のあゆみ』（宝川村所有地の地名）
から探してみますと「下宝川」と「遠瀬戸」は現集落の北
側にありますが、「古屋敷」と「開法峠」は見当たりませ
んでした。ただ、南側に「峠ノ上・下・南」という地名が
あるので「開法峠」と何らかの係わりがあるのかもしれま
せん。

これらの集落を一ヶ所に集めて宿場町を作るのに都合の
よい場所が勝善寺（般若寺）東側斜面でした。低平地だっ
たのですが当時は水が得にくかったため空き地だったのだ
ではないかと思えます。この場所は鳥井峠を頂点として東南
方向に鬼光頭川に向かって舌状に発生した地滑り地の末
端部です。大規模地滑りが終息した後、大雨などで上方
の地滑り地に土石流が発生し末端部の地滑り地の上に薄く土砂が堆積してできた地形です。町割りをする
のに制約があったのは北側が傾斜地だったことです。北側は土石流堆積物がのっていないため地滑り面と
の境が傾斜になり、南側に寄せて町割りをせざるを得ませんでした。そのため南側には裏道は作れませ
んでした。街道中央の水路（堀）を作るのは傾斜地ですから容易だったでしょう。勝善寺（般若寺）と赤岩
屋さんの所には屋並みで見通しのきかないクランクがしっかりできています。



▲ 国土地理院発行 1/2.5万地形図「徳沢」拡大・着色

宝川にはお寺が4つあったというのも特筆すべき事柄だと思えます。802年（大同2年）徳一開基とい
う勝善寺（後年、般若寺になる）、1228年（安貞2年）創建で天文年間（1532～1555年）に焼失した
観音寺、1429年（永享元年）創建の安養寺と修験の般若寺です。特に徳一開基と言われている勝善寺（宝
川）・如法寺（野沢）・円蔵寺（柳津）・法用寺（高田）などのお寺が会津西縁に南北に並んでいるのは徳一
の宗教圏を守るためのバリアーでなかったかと思えます。

これらのことから宝川は地滑り地形があったため古くから道が開け、宿場ができ、さらに越後と陸奥の
境界にあって関門の役割を果たした重要な場所だったことが分かります。



今月の表紙

天気の良い日曜日。SL
の写真を目当てに取材に行
きました。定番の撮影場所
にはすでに多くのカメラマ
ンが。私はその中に入る勇
気が出ず少し離れた場所か
らパシャリ。

レンズの中には、大迫力
で走ってくるSLと田植え
の風景。いつもの暮らしが
自然に重なった西会津なら
ではの1枚となりました。

編集後記

今月号も無事発行できま
した。取材にご協力いただ
いた皆さん、いつもありが
とうございます。

さて、6月といえば梅
雨。雨の多くなる時期です
ね。私はよく「傘、どこ行っ
た？」現象になります。そ
もそも「今日は持ってきて
いなかった！」なんてこと
も。毎年梅雨時期になると
傘の所在がいまいになり
ます。（二留）

